

要である、眞の自信は佛心である、佛自身の外にない、森羅萬象一切事物が自信することである、絶對を會せんとすれば一切の立場を棄て、無立場にならねばならぬ、道元禪師の學道用心集にも「參問宗師之時聞師說而勿同已見若同已見者不得師法也」「或一類已見爲先而披總卷記持一兩語以爲佛法後參明師宗匠聞法之時若同已見者爲是若不合蒼蒼者爲非不知捨邪之方登歸正之道乎」とある、著者は已見を立て佛心を證せんとするのである、即ち已見によつて見性せんとするものである、かゝる方法にて幾萬言を費して公案を解釋したればとて夫は依然として已見である、相對的である、このことに付ては著者自ら參學者の爲に評唱すると稱して居らるゝ無門關第一則の着語を見れば一目瞭然たることである筈である、無門は著者の如き人あらんことを恐れて、こゝに於て先づ第一に則に對する態度を實に親切に示して居るのである、然るに著者は字句の末、言語の皮相に捕へられて無門の眞意を知らず、その親切を少しも氣付かず居られる、それで著者はかゝる解釋を試みるよりは先づ第一則の無字を提擧して、無味の鐵槌頭を縱横に咬着し、心路を窮めて之を絶し、識神を滅し、本分の田地に一超直入して、無限の眞味を味つて見ることが最も急務でなからうか、而して後味を語ることは自由である、美いといつても、まづいといつてもその一言の中に絶對者が全身を露出して居るのである、教内のことも生命を得て來るのである、而して方便が方便でなくなつて實相となるのである。

要するに著者のかゝる解釋は識者の笑を招かんことを恐るゝのみならず、著者の爲及び讀者の爲を思つても甚無益なことである、

或は自身を誤り、讀者を誤ることはないであらうか、しかし尤も本書は無門關解釋と正當によぶことはできぬ、何とならばこの解釋の對象は無門關ではない、著者は無門關の字句を媒介として、或る勝手なものを自ら手製して、それを解釋したものである、無門關とは没交渉である、このつもりで讀めば別に害がないかも知れぬ、兎に角本書の杜撰なことは著者が第五則の頌に於て無門が香嚴は杜撰であるといつて居るのを、無門が眞に杜撰であると思つて居つたと思つて居らるゝ程杜撰なものである、著者は余のこの紹介批評を以て或は獨斷であると思はるゝかも知らぬ、しかしそれは余の罪ではない、却つて著者の獨斷の罪である、著者は眞の獨斷に到ることによつて余が獨斷でない所以を明にせらるゝことであらうと思ふ、著者幸に余の眞意を汲むに吝ならぬことを乞ふ。發行所、岩波書店、定價金貳圓(久松眞一)

人間の進化

理學博士 石川千代松著

十九世紀後半の生物學並に一般思想界に驚天動地の變動を與へたものの一は生物進化の實證なりしこと殆ど言を俟たない。殊に思想界に向つて與へたる驚畏は、人間の進化の過程の實證より來つたものである。吾人が進化の事實を探りて、各生物の進化の過程を明にする時事々に盡きぬ興味を感するのであるが、特にその過程が人間の進化を指示する場合に於て興味は其頂點に達する。生物進化の一般につきての著作は已に數種も出版せられて居るが、特に人間の進化に就きて詳述したる著書の缺けたることば多年學界の遺憾として居た所である。

本書は斯界の泰斗石川理學博士が學界の要求を察し人間の進化をば各種の方面より詳述せられ大日本學術協會の手によりて刊行せられたものである。我等は博士が公私多忙、身を以て、尙零細の時間を集めて一般讀書界のために本書を執筆せられたことに對しては無限の感謝を捧げざるを得ない。

本書は緒論の外、章を重ねる二十一、興味ある挿繪百三十餘個頁數四百五十四、外に索引十二頁がある。前半に於ては先づ人間進化の事實を確證せんとし、最初に人體の構造を論じて現今の人類の特徴を明にし、次ぎに之を現存せる脊椎動物と比較して人類の他の脊椎動物と類縁あることを確證し、更に之を動物及び人類の個體發生並に系統發生の事實に尋ねて其の然る所以を益々深からしめてある。精神的方面に於ても進化の事實の認むべきものありとし、類人猴の精神的動作、向性、本能、記憶意志及智能につきて興味多き敘述がある。

後半に於て著者は進化の事實を説明せんと企て、細胞分裂、受精、變異、遺傳等の諸學の知識に基き進化の起因を闡明せんとし、ダーウイン、ラマルク、ワイスマン、メンデル、ドウブリス等諸家の學說を擧げ殊にワイスマンの學說を詳論してその企圖を貫徹せんと試みられて居る。

末章に於ては將來の人間を論じて、今後の人類の進化の方向は「身體的方面に於けるよりも、寧ろ第三紀の終り頃にサルから人間が出来て來た時の言語の變化の方向であつて、之と共に意志の交換機關として最も必要な文字文章印刷等の進歩でなくてはならない」と論定せられて居る。更に著者は我國民の將來に論及して

「將來に於て吾の言葉を使用して居る人々と邦人の様に無茶苦茶な言葉を使用して居るものとの間には或、今日人類と類人猴との間に見る様な差違を生じはせまいかと心配するのである」と進化の過程に於ける言語の作用の極めて重要な所以を力説して我國民の國語及び國字問題に識者の注意を喚起せんと勸められて居る。

以上は本書の組織の主點と思つた所を記したに過ぎないがこの組織は幾多の興味ある事實によりて血と肉とを與へられて居るから、讀み初めてから巻を終るまで手を措かなかつたといふも過言でない。章を退ふも、或は抜き讀みするも共に興味を覺える稀に見る近來の好著である。發行所、東京市小石川區竹早町三十七、大日本學術協會。定價金參圓(稻崎淺太郎)

寄贈雜誌

哲學雜誌、思潮、丁酉倫理講演集、心理研究、人性、六合雜誌、東洋哲學、無盡燈、東亞之光、早稻田文學、新公論、内外教育、評論、小學研究、教育研究、教育學術界、教育界、教育時論、兒童、兵庫教育、静岡縣教育、岐阜縣教育、愛知教育雜誌、長崎縣教育會雜誌、都市教育、信濃教育、宮城教育、愛媛教育、